



① 六郷で羽州街道から分岐した生保内街道は、本堂城廻(千畑町)を経て角館に至る。角館から南部領盛岡までの街道は大半が、現在の国道46号と重なり、今は仙石トンネルで容易に通行できるが、藩境部分では国見峠あるいは仙岩峠の険しい山越えをしなければならなかった。南部側では秋田往来と呼んだように、両地は交易がさかんで峠には物資を留め置いたり休息する助小屋もあつた。江戸期前半、徳川幕府の御用馬買付け役人が羽州街道から生保内街道を利用したこと

がとくに多かつたためと思われる。佐竹北家の本拠となつた角館から盛岡に向かう生保内(角館)街道は、城下を見下ろす古城山南麓の細越坂で角館を出る。ここにはサイカチを植えた一里塚があつたという。中世後期、岩名氏が最初に町づくりをしたのが城廻であり、羽根ヶ台から荒川尻、卒田を経て白岩街道と出合う真崎野に達する。卒田には「子宝、安産の神」金勢神社があつて多くの婦人が詣でた。



④ 夏瀬温泉からの出口を過ぎ、柴倉を通つて、国道46号がJ田沢湖線と立体交差する玄太坂の手前から街道は南側の細津坂を越

て道路布設がさかんになると、生保内にも秋田を起点としての三五里元標が設置された。現在の角館警察署田沢湖交番の前にそれは残されている。久保田(秋田)と盛岡の両城下間は二九里(約一四キロメートル)、三泊四日の行程だつたというが、生保内や峠の向こう南部領の橋場は伝馬詰所に指定され、村の人々は国見峠越えの荷役や旅籠、馬口労働などで生計を立てることができた。

式 生保内街道

歴史の道をゆく

駒の嘶く国見越え

角館から国見峠



⑥ 距離を隔てて境塚が一つあるのはたぶん妥協の産物であり、この間は両藩で道の管理がなされ、交易上の助小屋もこの区間に置かれた。仙岩峠の命名者は明治新政府の大久保利通とされているが、旧の方峠から坂本川(岩手県雫石町)の谷間に下り、橋場の御番所に至る。それから葛根田川を渡り、中世角館城主戸沢氏発祥地の雫石に出て、生森、日向、前湯の二里塚を経由して盛岡に向かう。資料「盛岡砂子」に新田町の外形が雫石街道の始まりとあるように、雫石川、沢田の渡し左岸の新田町で街道は終わり、不来方(盛岡)城下町に入る。



- ① 常光院の戊辰戦争墓地(角館町西勝楽町) 常光院は佐竹北家の菩提所で、境内には戊辰戦争の際、角館周辺で戦死した九州各藩の官軍兵士の墓がある
- ② 卒田の金勢神社(田沢湖町卒田) 古くからの金勢様伝説が残る神社で、子宝と安産祈願に訪れる女性は多い。ご神体は男性器をかたどった石
- ③ 出羽三山碑(田沢湖町真崎野) 道路脇に立つ高さ約2.5mと大型の石碑。当時この辺からも出羽三山参詣が盛んだったことがうかがえる
- ④ 草薙家住宅(田沢湖町生保内下堂田) 国の重要文化財に指定されている幕末期の民家。住宅と厩(馬屋)がL字型に配置された曲り屋となっている
- ⑤ 生保内町道路元標(田沢湖町生保内) 明治10年代に設置された25里元標。かつての生保内番所や札場だった所、現在の田沢湖交番前に残る
- ⑥ 『方言修行・金草鞋』21篇(十返舎一九)より 江戸時代の旅のガイドブックとも言えるこの本に書かれた難所、国見峠越えのようす(町立角館図書館蔵)
- ⑦ 土のぼつと一里塚(田沢湖町六枚沢) 生保内街道起点となる六郷から数えて12番目の一里塚。現在は仙岩峠山腹のヤブの中に片側1基の塚が残る
- ⑧ 領界碑(田沢湖町生保内沢) 国境となる的方の尾根に文化2年(1805)に建立。この場所からは盛岡の街や、岩手山の姿が望まれる
- ⑨ 生森一里塚(岩手県雫石町七ツ森) 国道46号を挟んで一対現存している。共に松が植えられていたが、北側は枯死、南側には2本残されている